

## 身近な縄～特別展「飯能縄市」にちなんで～

引間 隆文

この秋、当館では、特別展「飯能縄市」を開催します。

飯能の市街地は、350年ほど前に立てられた市から発展したもので、縄やムシロを扱っていたことから「飯能縄市」と呼ばれていた、とされています。そこで今回は、特別展にちなんで「縄」について記したいと思います（「市」については、ぜひ特別展をご覧ください）。

今も昔も、物を結んだり縛ったりすることは日常的なことです。今は結束バンドやテープ、ワイヤーなど用途に応じて様々な材質・形状の道具がありますが、昔は植物で作られた縄が主でした。



炭俵編み 島田稔氏所蔵

代表的な縄の素材と言えば、稲わらでしょう。かつて稲わらは豊富に手に入る素材でした。ただ、それは水田での稲作が主となっている地域の話です。水田が少ない山村では、良質な稲わらの入手は困難でした。山村の人々が自分たちで生産可能な量以上に縄が必要な場合は、他所から購入するしかありませんでした。そのため稲わらの豊富な農村と山村との中間点に位置する飯能の市で縄が売買されていたものと考えられます。

飯能の山間地域において代表的な生業であった炭焼きでも縄は不可欠でした。「炭に縄？」と思われるかもしれませんが、実は、炭の材料としてではなく、焼きあがった後に炭を詰める炭俵の材料として必要だったのです。炭俵は、茅を細いわら縄で編んで作りました。炭俵用の縄は、柔らかく均一な細さであることが理想であったため、材料に良質な稲わらが必要でしたが、水田の乏しい飯能の山間地域では入手困難でした。そのため不要となった米俵を米屋からわざわざ購入し、それをほどいて縄にしたこともあったそうです。

縄は、実用以外にも用途があります。例えば、しめ縄です。漢字では、「注連縄」「七五三縄」などと表記し、神聖な空間であることを示す縄です。今は神棚の無いお宅も増えているので、日常的に見かける機会は減っているかもしれません。

でも、お正月ともなれば、正月飾りとしてまだあちこちで見かけることができます。かつては、年末に縄を自分でなってしめ縄(しめ飾り)を作り、神棚などに飾って新年を迎えたものでした。ただ最近では、まるでクリスマスリースのような、縄っぽくない正月飾りも増えていますので、この先、しめ縄がますます縁遠くなっていくのかもしれません。

かつての暮らしに不可欠だった縄。その縄などを扱う市から発展した飯能の市街地。「禍福はあざなえる縄の如し」などと言いますが、まちとそこに暮らした人々の歴史も、また「縄の如し」なのかもしれません。

特別展「飯能縄市」で、飯能の市街地の歴史に思いを馳せてみませんか。

### 【参考文献】

飯能市教育委員会『名栗の民俗(下)』平成20(2008)年